



# 本多静六博士との様々な接点

徳島大学生物資源産業学部准教授 佐藤 征弥

## ■授業で本多静六博士を紹介

本多静六博士について書く機会をいただいたことを感謝いたします。私のもともとの専門は、栽培植物や藻類を対象とした分子生物学の分野であり、まったく本多のことは知らなかったのですが、巨樹や公園の調査研究に関わるようになって、必然的にさまざまな形で本多の仕事と遭遇し、驚くことが重なりました。本多はいろいろな人物なのか興味を持つようになり、自伝(本多 2006)を買って読んだ結果、すっかり心酔してしまい、今では大学の授業や社会人向けの講演で本多のことを紹介しています。研究面においてどのような関わりがあったかは

## 「首かけイチヨウ」と同じDNAタイプのイチヨウ(佐藤ら 2009より)

住所、♀・♂、幹の胸高周囲(cm)
青森県弘前市 弘前公園 ♂650
茨城県水戸市八幡町 ♀未測定
東京都千代田区 日比谷公園 ♂696
神奈川県松田町寄 寄神社 ♂660
三重県亀山市南野町 宗英寺 ♀745
和歌山県古座川町三尾川 光泉寺 ♀625
奈良県室生村下田口 田口水分神社 ♀760(外周)
広島県三次市作木町 迦具神社 ♂810
鳥取県倉吉市桜 大日寺 ♀多幹叢生
鳥根県浜田市下府町 伊甘神社 ♂610
徳島県阿波市境目 ♀930(外周)
徳島県吉野川市山川町宮島 八幡神社 ♂658
徳島県山城町上名 ♀1150(外周)
徳島県上板町瀬部 乳保神社 ♂/未測定
徳島県西祖谷山村西岡 ♂約800(外周)
徳島県石井町浦庄 銀杏集会所 右株 ♀
徳島県石井町浦庄 銀杏集会所 左株 ♂
徳島県石井町高原 天満神社 ♂1023
徳島県石井町新宮本宮両神社 ♂1074
徳島県石井町石井重松 八幡神社 ♂600
徳島県東祖谷山村釣井 ♀803(外周)
徳島県徳島市国府町芝原 八幡神社 ♂752
徳島県北島町北村 光福寺 ♀806
徳島県鳴門市撫養町 長谷寺 ♀共通731
高知県吾川郡仁淀川町 長者 十王堂 ♂1165
高知県四万十川市有岡 真静寺 ♂700以上
高知県宿毛市小筑紫町伊与野 ♂主720
高知県中土佐町上ノ加江 笹場 ♂660
高知県土佐市高岡町 ♀未測定
愛媛県宇和島市津島町 岩松 ♂870
愛媛県松野町蕨生奥内 奥内薬師堂 ♀970
愛媛県松野町蕨生游鶴羽 游鶴羽薬師如来 ♂650
愛媛県大洲市八多喜 聖臨寺 ♀624
愛媛県砥部町五本松 常磐木神社 ♀585
福岡県甘木市寺内 美奈宜神社 ♂610
福岡県杷木町 性不明/未測定
大分県大分市広内 円通寺 No.2の幹 ♀主768
長崎県対馬市対馬琴 長松寺 ♂1350
長崎県鷹島町三里免今宮神社 ♀共通655
宮崎県高岡町内山 二見家 ♀1025
宮崎県山田町山田椎屋(石風呂) ♀910
宮崎県都城市都鳥町 龍峯寺墓地 ♀642

後述しますが、大学で自然保護について教える授業では、国立公園設立時の本多のエピソードを紹介しています。阿蘇を国立公園にしようと奮闘する人物の熱意にほだされて、本多がひとはだ脱ぎ、調

査費用の捻出ができずに滞っていた国立公園設立計画を、費用は自分で出すから計画を進めてくれるよう大臣に掛け合っただという話です。学生たちは、無味乾燥な概念や制度の説明を聞くよりも、個人の情熱が世の中を動かすといった話を喜びますし、当時の自然環境や時代背景がすつと頭に入るので、自然保護の変遷を理解するのに大いに役立ちます。この国立公園設立の話は、アメリカで「森の聖者」「自然保護の父」「国立公園の父」などと称されるジョン・ミューアと似たものがあり、一緒に紹介しています。また、別の授業では、プレゼンの技法を学ぶという主旨なのですが、自分がすこい

と思うものをいかに上手に伝えられるかを競いあうというものです。例示として時々私がやって見せるのですが、そこで本多静六の生涯を紹介する三十分ほどのプレゼンをしています。自伝の中に出てくるドイツで博士を取得した際のエピソードなどは、本多の勤勉ぶりや博士の価値の高さなど現在の日本の大学とは大きく状況が異なっており、今の学生たちにマネしてもらえないかは分かりませんが、おおいに刺激を受けていることは見て分かります。

以下、本多と私の研究との関わりについて順をおって紹介していきます。

■「首かけイチヨウ」のDNAタイプ

私の手がけている研究テーマの一つに巨樹イチヨウのDNA分析があり、試料の一つに日比谷公園の松本楼前の「首かけイチヨウ」がありました。二〇〇四年に「首かけイチヨウ」の葉を採取したのですが、本多のことを知ったのは、その時が初めてだったと思います。「首かけイチヨウ」は、道路拡張により伐られるはずだったのを本多が「自分の首を賭けても」と言って移植した樹です。移植は明治三十四年（一九〇一）のことで、ちょうど本多が日比谷公園の設計にあたっていた時期と重なります。本多にしてみれば、公園に植える大きな樹木をうまく調達できたという考えもあつたかもしれませぬ。

イチヨウについて少し説明しておきます。イチヨウは古くから存在する植物ですが、氷河期に絶滅寸前に減少したため、人との関係が歴史に刻まれたのは、遠い昔のことではありません。イチヨウに関する記述が歴史上初めて登場するのは、一二二五年頃の中国の書物『全芳備祖』であり、十一

世紀の宋時代に、二人の役人が江南の鴨脚と呼ばれる植物を皇帝に献上する際、「脚」という文字があるのが汚らしいという理由で、名称を「銀杏」と改めたことが記されており、一〇五三年に都の下京（今の開封市）に入貢したとあります（堀・堀2005）。日本への伝来は、文献史料では、公家である近衛道嗣の一三八年の日記『愚菅記』に庭に銀杏が植えられていることが記されているのが銀杏という言葉が現れる最初です（堀・堀2005）。

私は日本国内へのイチヨウの伝

<p>前頭 矢上ノ大樟 四丈五尺十間</p>	
<p>東</p> <p>樹名 樹高 樹齢 所在地</p> <p>前頭 矢上ノ大樟 四丈五尺十間 樹高 樹齢 所在地</p>	<p>西</p> <p>樹名 樹高 樹齢 所在地</p> <p>前頭 矢上ノ大樟 四丈五尺十間 樹高 樹齢 所在地</p>

『大日本老樹名木番附』の一部  
右に「矢上の大クス」の箇所を拡大して示す



同じ角度から見た矢上の大クスの200年  
左上：『阿波名所図会』(1811)  
右上：『阿波名勝 第一号』(1922)  
左：2005年

来・伝播の道筋を明らかにするために、全国の巨樹イチヨウ（幹の胸高周囲が六m以上）のDNA解析を進めてきました。巨樹を対象としたのは、樹が太いほど樹齢が古く（実際は、そう単純ではありませんが）、イチヨウが日本に伝来した頃の分布を示しているだろうと考えたからです。調査の結果、ミトコンドリアDNAのHaplotypeイントロンの変異により二十以上のタイプに区別され、それぞれが特徴的な地理的分布を示すことを明らかにしました（佐藤2009）。

「首かけイチヨウ」は、西日本

1×西日本2と名づけたタイプであり、前頁の表に示したように西日本に多く分布し、東日本ではほとんど出てこないDNAタイプです。なぜそのようなイチヨウが、そこにあつたのでしょうか。「首かけイチヨウ」は、もともとは江戸城にあつたそうですので、西国のイチヨウが持ち込まれて植えられたのかもしれない。今後、詳しく調べたいと考えています。

■矢上の大クスと「大日本老樹番附」  
徳島県藍住町矢上にある春日神社に、矢上の大クスと呼ばれるクスノキがあり、徳島県の天然記念物に指定されています。根元には、火災によって生じた人が入れる大きさの空洞があり、幹は所々で折れたり伐られていて、相当に痛々しい姿です。この樹については江戸時代の文化八年（一八一）に描かれた絵と大正二年（一九一三）の写真が残されているのですが、それらを見ると樹は現在の姿とは異なる堂々とした姿でした。また、これらの資料では、この樹を同じ方向から写しており、百年以上の年代の隔たりにもかか

わらず、樹の特徴はほとんど変わっていないことに驚かされます。その後、この樹は昭和三十七年(一九六二)に火災により燃え、昭和四十三年(一九六八)には台風により幹が裂けて倒れるという出来事がありました。倒れる前は、幹周囲がおよそ十八mだったのが、現在は十三mになりました。また、倒木後に保護措置が講じられ、大枝がかなり伐られました。私も江戸末期の絵や大正期の写真と同じ角度から写真を撮影したのですが、昔の面影がどこに残っているのかよく調べないと分からないくらいその姿が大きく変わってしまいました(右図)。とはいえ、およそ一世紀毎に同じ角度からみたこのクスノキの大樹の姿は、樹木に関する歴史資料として価値のあるものだろうと思います(佐藤2007)。

さて、この樹は、本多博士が編纂した『大日本老樹名木誌』(本多1913a)や「大日本老樹番附」(本多1913b)に載っています。『大日本老樹名木誌』は、本多が自ら行った調査や全国各地に呼びかけて集めた老樹・名木のデータを編纂し、大正二年(一九一三)に大日本山林会が発行したものです。収められた千五百本の樹について所在地、地上五尺の周囲、樹高、樹齡、伝説が記されています。この調査が行われた背景には、同書の前書きに「本書ハ林學、林業上ノ資料及ビ一般世人ノ所謂天然記念物特ニ老樹名木保存ノ資料トシテ編纂セルモノナリ」とあるように、明治期の近代化により開發や生物の乱獲が進んだことへの反省として自然保護や文化財保護の気運が高まっていたことがあります。そして、大正八年(一九一九)には、天然記念物に関する最初の法律である史蹟名勝天然紀念物保存法が公布されます。

『大日本老樹名木誌』と『朝鮮巨樹老樹名木誌』における植樹者の比較

日本		朝鮮半島	
植樹者	数	植樹者	数
祖先	4	祖先	28(53*)
天皇・皇族	17	王・王族	4
公家	9	役人、学者	51
僧	70	僧	12
仏教以外の宗教者	9		
武士	78		

\*祖先が植えたとは明記されていないが、現所有者と植樹者の姓が一致していて、祖先が植えた可能性があるもの。

員会の教育部長で本多の顕彰に長く携わっておられる渋谷様より送っていただいたものでした。

■日本と朝鮮半島の巨樹の比較

前章で紹介した『大日本老樹名木誌』は、まことに素晴らしい資料であり、整理して詳細に分析しようと考えました。また、同様の本が朝鮮半島でも作成されていたことが分かりました。『朝鮮巨樹老樹名木誌』といい、『大日本老樹名木誌』が刊行されてから六年後の大正八年(一九一九)に朝鮮総督府から刊行されたものです(石戸谷2016)。前述のように『大日本老樹名木誌』では千五百本のデータが収められており、『朝鮮巨樹老樹名木誌』では、およそ三千二百本が収められています。私は、これら二つの資料を比較し、日本と朝鮮半島の巨樹に対する精神性や文化の違いを明らかにしようとして試みました(佐藤ら2019a)。

まず、樹種について掲載本数の多い樹種を順番に挙げると、『大日本老樹名木誌』ではマツが最も多く、以下スギ、クスノキ、ケヤキ、サクラ、イチヨウ、シイ、ウメ(以下略)と続きます。『朝鮮巨樹老樹名木誌』では最も多いのがケヤキで、以下エノキ・ムクエノキ(区別していない)、イチヨウ、チョウセンアカマツ(アカマツのこと)、ヤチダモ、エンジュ、ヤナギ類、チョウセンモミ、ハリゲヤキ(以下略)と続きます。

日本と朝鮮半島の違いで顕著なのは、「墓標」としての樹の存在です。日本では墓標として植えたと思われるものが四十九本ありますが、朝鮮半島では一本もありませんでした。また、著名人が携えていた杖、箸、鞭が根付いて成長したという「杖立て」伝説を有する樹が日本では三十三本みられたのに対して、朝鮮半島では二本で

あったことも大きな違いです。植樹者についてみると、朝鮮半島では所有者の「祖先」が植えたと思われる樹、「役人、学者」(それらが重複している場合が多い)が植えたとされる樹が多いことが分かりました(前頁の表)。朝鮮半島では、九五八年から一八九四年まで続いた科挙制度の影響が強く反映されています。

樹にまつわる伝説を比較すると、共通点としては、「子授け」など神木に願い事をする、「樹が血を流す」、「祟りをなす」が挙げられます。なお、「祟りをなす」は『朝鮮巨樹老樹名木誌』には極めて多い伝説です。一方、相違点を見ると、最も大きな違いは「朝鮮巨樹老樹名木誌」には地縁・血縁に基づくものが非常に多いことで、巨樹を前にして行なわれる祭事や祈禱や、植樹に関して先祖が植えた、あるいは開拓の際に植えたという話がそれにあたります。一方、『大日本老樹名木誌』にはこのような地縁・血縁に関するものがほとんど見られません。他には、女性にまつわる伝説が日本の方にずっと多いこと、イチョウの乳信仰が日本では見られるが朝鮮

半島では見られないことなどが挙げられます。

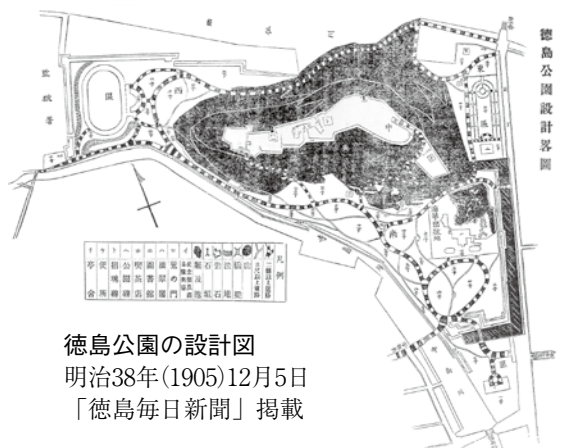
■本多が二番目に設計した公園

徳島市の中心部にある徳島中央公園は、明治三十九年(一九〇六)に旧徳島藩主の居城跡に「徳島公園」として開設されました。日比谷公園に次いで我が国で二番目に造られた西洋風近代公園であり、日比谷公園と同じく本多静六と弟子の本郷高德の設計によるものです。徳島公園は、日本の公園史の中であまり取り上げられることがありませんでしたが、私は明治三十八年(一九〇五)の新聞紙上に徳島公園の設計図とその解説が掲載されていることを見つけ、図面と一緒に記されていた公園設計の意図や理念を読みとって、公園史の中で位置付けを試みました(佐藤ら2012b)。

日比谷公園は日本初の西洋風近代公園として、日本庭園では考えられない大道路が敷設され、運動場、花壇、噴水、音楽堂といった多目的な施設・設備を備えた斬新なものでした。しかし片や日本庭園を設けて、完全に西洋風にはしなかつたことに彼の優れたバラ

ス感覚が見てとれます。徳島では、日露戦争の戦捷記念に公園を作ることが決まり、本多に設計を依頼しました。設計をまかされた本多と弟子の本郷は、日比谷公園の手法を徳島公園にも取り入れた。共通点を挙げると、幅が広く曲がった道、運動場やグラウンド、花壇・植物園、図書館、噴水、飲食店などがあります。これらの点はこの二つの公園にとどまらず、その後の日本の公園に取り入れられていきました。また、本多は日比谷公園の設計にあたり、ドイツから持ち帰った公園の設計図集『造園設計図案』から三枚の図を取り入れています。そこで、徳島公園の設計においてもこれを参考にしていく可能性があると考えて調べたところ、ドイツのザイファースドルフにあるブリュール伯爵の居城の図面との類似点が見つかりました。

ところで、日比谷公園と徳島公園は一見すると類似点よりも相違点が目立っています。日比谷公園は前身が練兵場であり、北東部には石垣土塁が残るだけでほぼ何もない状態から設計することができましたが、徳島公園は城趾であり、



徳島公園の設計図  
明治38年(1905)12月5日  
「徳島毎日新聞」掲載

石垣が多く残っており、藩政時代から残る鷲の門、滴翠閣という建物、さらに日本庭園もすでに存在していました。しかし、最も大きな違いは、徳島公園の場合、城山という高さおよそ六十mの山が存在し、鬱蒼とした森林となっていたことでした。本多は「天然林として甚貴重すべきもの」とその価値を認め、「林木の伐採は道路の開鑿及び眺望を得るための他は之を避け」と述べているように、石碑と小さな喫茶店の他には人工のものを設置しませんでした。この点において本多の自然保護思想が見てとれ、日比谷公園とは別の考え方が表れています。

本多は「日本公園の父」と呼ばれ、都市公園から森林公園にいたるまで、日本各地の主要な公園の設計を手がけ、その数は数百になります（本多静六博士顕彰事業実行委員会(2002,2004)。公園設計における本多の考え方がうかがわれる例として大正九年（一九二〇）の偕楽園の改良案を挙げます。ここでは、偕楽園を「公園の先駆け、様式斬新、技術上極めて優秀」等と評価する一方、具体的な改良意見として「運動場・記念碑を廃し、旧態に復すこと」など「復旧保全に全力を注ぐべきである」と提言しています（本多静六博士顕彰事業実行委員会(2002)。これは、日比谷公園や徳島公園で評価を得たこととは逆の方向性を打ち出していることとなります。常に同じような公園を作ることとをよしとせず、各々の歴史や状況を重視するという公園づくりにおける彼の思想が感じられます。

■本多の鍋を飾っていたドイツの家庭

最後に、私の研究とは関係ありませんが、最近、本多が新聞に寄稿したとても面白い記事を偶然見

「婦女新聞」大正4年（1915）1月8日号の本多の記事



つけましたので紹介します。発見したのは「婦女新聞」という現在は廃刊になっている女性のための週刊の新聞で、大正四年一月一日と一月八日の二回にわたり、本多が「十五年間私の鍋を飾って置いた獨逸婦人」というタイトルで書いたものです。内容は、本多がドイツ留学時代ミュンヘンに下宿していた時のことで、博士取得のために猛勉強していた際に、下宿先の家の三姉妹が本多が試験に受かるよう毎朝神に祈っていたこと、日本に戻った本多が十五年ぶりに

下宿先を訪ねた時に、下宿先のお母さんが涙を浮かべて喜び、彼の勤勉さに感銘を受けた彼女が、本多が去ってから使っていた鍋を棚にずっと飾っていて、それを見せてくれたこと、そして三姉妹の末娘が歌手になっていて、一緒に馬車に

乗って出かけると周りから囁し立てられたこと、といった心温まるエピソードが記されています。この記事は、本多静六記念館にお送りして収蔵していただいていますので、ご興味のある方はぜひご覧になってください。

引用文献

本多静六『大日本老樹名木誌』大日本山林会、大正二年(1913a)

本多静六「大日本老樹番附」東京農科大学造林学教室、大正二年(1913b)。

本多静六『本多静六自伝 体験八十五年』実業之日本社(2006)

本多静六博士顕彰事業実行委員会 編集・発行『日本林学界の巨星 本多静六の軌跡』(2002)

本多静六博士顕彰事業実行委員会 編集・発行『日本の公園の父 本多静六』(2004)

堀輝三・堀志保美『写真と資料が語る総覧・日本の巨樹イチョウ ― 幹周7m以上22m台までの全巨樹』内田老鶴圃(2005)

石戸谷勉『朝鮮巨樹老樹名木誌』朝鮮総督府(1919)

佐藤征弥「矢上の大クスの歴史」徳島大学総合科学部人間社会文化研究第2巻3160頁(2007)

佐藤征弥「DNAからみたイチョウの日本への伝来・伝播」TREE DOCTOR 16巻1423頁(2009)

佐藤征弥ら「日本と朝鮮半島の巨樹・樹種および巨樹にまつわる伝承の比較」植生史研究Vol.21, No.1, 3-19頁(2012)

佐藤征弥ら「徳島公園(徳島中央公園)の造園設計についてー日比谷公園及びザイファースドルフ城との比較ー」徳島大学地域科学研究Vol.2, 42-54頁(2012)

## 第十回本多静六賞 受賞者のご紹介

埼玉県農林部森づくり課

主査 山崎 宏剛

### 一 第十回本多静六賞について

県では、本県出身で日本最初の林学博士となった本多静六博士の精神を受け継ぎ、緑と共生する社会づくりに貢献した個人・団体を、平成十九年度から表彰しています。昨年は博士生誕百五十年と本多静六賞も節目の第十回が重なり、皆様の注目度が高かったのか、過去最多の二十一件（個人七、団体十四）の応募がありました。そのため選考員会での議論も白熱し、今回は初めて特別賞を設けることになりました。

その中で本多静六賞は寄居町の坂本全平氏が、特別賞は久喜市立三箇小学校が受賞されましたので御紹介します。



第十回本多静六賞受賞者  
坂本全平氏

### 二 坂本全平氏の経歴と功績

○経歴

坂本氏は、寄居町森林組合長、寄居町議会議長、埼玉県中央部森林組合代表理事組合長、埼玉県森林組合連合会会長など多くの要職を務め、平成十七年には旭日双光章を受章されています。

○功績

所有林において、百年生を目標とした複層林施業による持続的な林業経営を行う一方、森林施業を効率的に行うため作業道を高密度に開設するなど林業の振興に貢献し、作業道についてはハイキングコースとしての利活用も視野に入れた路線選定を行うなど、森林を地域の観光資源と捉えた活用を図っています。

さらに、浦和高校同窓会を始めとする森林ボランティアやNPO法人主催の作業体験等を積極的に受け入れ、活動に対する協力や指導を行うなど、地区の活性化のため都市住民との交流に尽力されています。

### 三 久喜市立三箇さんか小学校の功績

○功績

本多静六博士の母校であり、博

士の生き方や考え方を学年に応じた内容に教材化して学習するなど、博士の精神を受け継ぐ独自の教育活動に取り組んでいます。



六年生の社会科見学の様子

### 四 本多静六賞表彰式

表彰式は、五月十七日に知事公館で行い、上田知事から坂本氏に表彰状と賞金が、三箇小学校の小島校長と児童代表二人には表彰状が贈られました。



表彰式の様子

### 五 特別賞記念品贈呈式

七月二十日に、三箇小学校の体育館において特別賞の記念品（定規）贈呈式を行いました。

この記念品には第二・第三の博士が誕生することを願い、博士の座右の銘が記されています。

なお、当日は、埼玉県のマスコットキャラクターのコバトンも駆けつけ、一緒に特別賞の受賞を祝いました。



記念品贈呈式の様子と記念品

### 六 終わりに

県ではこれからも賞の表彰を通じて、博士を顕彰するとともに、緑と共生する社会づくりに取り組んでいきます。

引き続き皆様の御理解・御支援をお願いいたします。

### 静六博士に思いを寄せて

〜大先輩に学ぶ〜

三箇小学校校長 小島 延之

三箇小学校は、本多静六博士を輩出した学校です。本校の児童昇降口の前には、静六博士の指導のもと植えられたとされる赤松五本からなる『寄せ植えの松』があります。子どもたちは毎朝、静六博士のゆかりの松の前を通り、静六博士の胸像を見ながら登校しています。そこで、本校の大先輩の功績やその教えから学んでいる取組みについて紹介します。



寄せ植えの松

#### 一 本多静六週間

静六博士生誕の日（七月二日）

を含めた一週間を本多静六週間として設定しています。この期間に静六博士の生き方や努力の姿等を全校児童に向けて、校長講話を行っています。

#### 二 自作資料を活用した道徳教育

各学年の発達段階に応じて、静六博士の逸話や生き方、考え方を取り上げ、本校独自の静六博士に関する自作資料を作成しています。それを活用し、子どもたちの豊かな心、道徳的実践力を育てようと考え、七月の静六週間に全年が授業を実施しています。



道徳の授業風景

#### 三 総合的な学習の時間

〜夢の森タイム〜

総合的な学習の時間では、三年生から六年生までが子どもたちの発達段階や学習の系統性を考えながら様々なことを調べています。静六博士の生き方や努力の姿、さらに博士の功績と関連付けた環境や世界に目を向けた学習を進めています。

三年生 菖蒲大好き！たんけん隊  
四年生 ようこそ大先輩本多静六博士へ  
五年生 本多博士といっしょに自然を守ろう  
六年生 本多博士とともに世界へ

はばたこう



夢の森タイム

#### 四 静六博士と子どもたち

○本多静六博士資料室

本校の資料室は旧菖蒲町教育委員会との協力により、本多静六博士関係の資料を集め、平成十四年頃、余裕教室を活用して設置されました。資料室には静六博士の写真や記念誌、埼玉新聞社作成・埼玉県農林部森づくり課が発行した学習マンガ「本多静六博士物語」などが備えられています。それらを使って、子どもたちは静六博士について熱心に調べています。

十一月には、彩の国教育週間に合わせて六年生が静六博士について調べたことを地域の方や低学年に説明する機会を設けています。



本多静六博士資料室の紹介

○緑の少年団

本校は、緑の少年団に参加しています。主な活動は、道のオアシスに併設されている本多静六博士生誕地記念園の清掃活動や緑化活動を進めています。

また、学校周辺美化活動として、三崎の森公園や学校周辺の除草作業、清掃やゴミ拾いなどを実施しています。子どもたちは、公園や街をきれいにしようと一生懸命に取り組んでいます。

○「首かけイチョウ」と子どもたち

毎年、六年生が日比谷公園の首かけイチョウを見学に行っています。どっしりと根を張った大木を見上げ、どのように運んだのか、



首かけイチョウ

静六博士は、常に成功を収めてきたわけではなく、つらく苦しいときもあつたり、失敗したりしたことなどの行動が、子ども

つていきたいと思いました。

よくこれまで枯れずにいることに驚きさえも感じていました。大イチョウを眺めながら、静六博士のすばらしさ、業績に改めて感心させられました。

《児童の感想》

私は、静六博士が首をかけて移植した「首かけイチョウ」を見て、静六博士は、すばらしくて、あきらめない人だと思いました。また、その首かけイチョウは、日比谷公園の生みの親である静六博士に守られたすごく貴重な木だと思いました。日比谷公園は明治三十六年に開園したといわれています。私も静六博士や「首かけイチョウ」のように、すくすくと育ち決して何があつてもあきらめない心を持つていきたいと思いました。

もたちに親近感、現実感となって迫り、静六博士に対して親しみをもち、「自分は静六博士のようなことはできないが、静六博士のような心を持つことはできる」と思う共鳴感が育つてほしいと思っています。

また、静六博士が手掛けた公園や森林を調べることで自然環境や身近な環境に興味を示し、自分ができること、自然の大切さを学んでいってくれればと思います。

さらに、本多静六博士は努力の人であり、何事にも前向きに対処していく人物です。それは、今の教育にも相通じるものがあるのだと思います。博士の人生訓『人生は努力であり、努力は幸福を生む』という言葉のように、子ども

たちには、何事にも努力を惜しまず、一生懸命に取り組んでいくことも本多静六博士から学んでほしいことの大きな一つです。

五 本多静六賞特別賞受賞

五月に埼玉県知事公館において本多静六賞の表彰式が行われました。本校は、これまでに述べてきた本校独自の教育を進めてきた結果、この度の特別賞をいただくことができました。しかし、このような賞をいただくことができたのは、学校のみならず、地域の方々や本多静六博士についてかかわってきた方々のご協力とお力添えがあつてこそその受賞だと感謝しています。子どもたちも驚きの中にも、うれしさがこみあげてきていました。



特別賞授賞式

これからも、本多静六博士の母校としての誇りを持ち、歴史と伝統ある三箇小学校の子どもたちが心豊かにたくましく成長していつてくれることを願っています。



## ゆかりの地を訪ねて

本多博士の発想に感動

久喜市 野口 正夫

秋も深まった平成二十九年十一月九日 「本多静六博士ゆかりの地訪問」をテーマにした研修に参加させていただきました。

当日は好天に恵まれ、バスもスムーズに都心に入り、日比谷交差点にさしかかると研修地である日比谷公園はもう目の前です。色づいた木々に囲まれた十六へ



日比谷公園（プラタナス）

クタールを超える広大な公園に降り立って落ち葉を踏みしめたときは、大都会の喧騒を遮り静寂さが保たれた別世界にたどり着いたような感じがしました。早速、公園事務所に案内された後、日本初という「西洋風の公園」内を歩き百十余年もの間多くの人に愛され続けていたことを、豊富な事例を交えながら説明を受けました。

本多博士の公園づくりコンセプトは、七割が西洋風で後の三割を日本風とし、そこには第一に花を、第二には音楽を取り入れることにあつたといわれます。その解説の

通り、国内では珍しい外来種の木々や花々で彩られ、壮観さを演出する大噴水、加えて自由な雰囲気のある野外音楽堂など西洋的なところが的確に配置されています。

また、園内の一角にある池は、我が国本来の木々に囲まれ、緋鯉や真鯉がゆったりと泳いでいます。腰を下ろして静かに眺めていると、日本特有の侘び寂びの境地に誘い込まれます。なんと素晴らしいことでしょう。

一方、当公園のシンボルとされている推定五〇〇年ともいわれる銀杏の大きさは、激動の日本の姿をくまなく見続けていたのです。従って、私が学生時代にここで開催された水爆実験反対の学生デモに参加し、警官隊と衝突して園内を踏み荒らしたこともしっかりと見届けられていたわけです。

予定の研修を終えてバスに向かう私は、これまで本多博士が設計監理した貴重な公園であることを知らないままにいたのがとても恥ずかしいことだと思つたとともに、過去の出来事に深く陳謝しながら、今後は、すべての公園が訪れる人々を癒し、生きることの喜びに浸れるような場所であるよう努力

していかうと誓つたのです。

平々凡々とした日々を過ごしていた私は久しぶりに感動し、充実した一日でありました。

この企画をされました主催者に心から感謝申し上げます。

明治神宮を見学して

久喜市 荒田 茂

木枯らしの吹く中、バスは市役所を出発し、日比谷公園、明治神宮へと向かいました。

車中では市報に連載された「本多静六博士没六十年記念」の記事が指名された方々により朗読されました。皆さん、明瞭でよく通る声で読まれたのには感心しました。

バスは神宮前駅を通過し、大きく曲がると車中で説明のあつた、菖蒲の青年団が大八車で運んだ大楠が右側に、左には博士の縁者の献木による楠が聳えていました。

本多博士が百五十年先を見越して、一九一六年に植栽が開始された神宮の杜は、元井伊家の下屋敷で、敷地は七十ヘクタールあつたそうです。

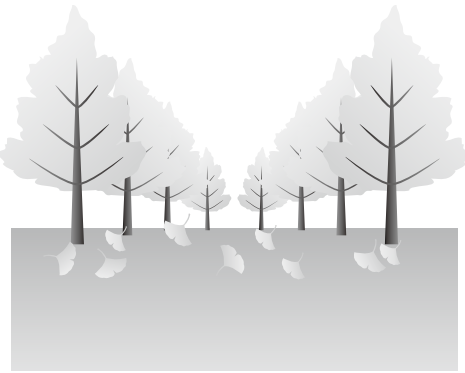
当初、森には三百六拾五種を植栽しましたが、平成二十三年の調

査では三十五種が確認されたそうです。約三分の一が他の樹木との競争に負けたか、この土地に合わなかったかして、消えてしまった。見学では杉が生存競争に敗れ、枯れて他の木にもたれ掛かっている姿や広葉樹がもつと光をもつと光をと幹を右に左に、のたうち廻っているのが大変印象的でした。これが「天然更新」か。許可をいただき、足を一步、杜



明治神宮を見学するようす

の中に踏み入れるとふわふわの絨毯の上を歩いているような感じがしました。落ち葉が積み重なり数十センチにもなっているようです。なお、神宮の杜では一年で約七トンの葉、小枝や実が土に帰っているそうです。今回「本多静六博士ゆかりの地訪問」に参加し最も印象に残ったことは、日比谷公園や明治神宮に関係する人たちが博士を非常に尊敬していることが説明の端々に感じられたことです。



### 役員研修会に参加して

本多静六博士を顕彰する会  
小山みち子

平成二十九年度の研修は群馬県前橋市の敷島公園でした。八時に菖蒲文化会館前を出発し、約一時間半で最初の見学場所、笠原の大笠松につきました。

この松は前橋城主酒井雅樂頭が愛蔵していた鉢植えを八木家の祖先が拝領し、自宅の庭に移植して育てたものだと言われています。



笠原の大笠松

成長して庭が狭くなると松を切らずに家を三回立て直して後退したそうです。個人の家の庭に樹齢四百年、高さが七メートル、枝先を一周すると八十メートルあるそうです。松の緑はいきいきとしていて見事な松でした。

次に訪れたのは、当日の研修場所である敷島公園です。敷島公園は利根川の東岸に位置し面積三十七・六ヘクタールの公園です。スポーツ施設区域（十七・八ヘクタール）は県管理。松林、バラ園、ボート池などレクリエーション区域（十九・八ヘクタール）は市管理になっています。約二千七百本の松林があり、平地の松林としては、全国有数の規模を誇ります。

松は、約百年前に利根川の洪水を防ぐために植えられたもので広く市民に愛されています。又、初夏と秋のシーズンには六百種七千株のバラが咲き、人々を楽しませてくれます。スポーツ施設の上毛新聞敷島球場は、アマチュアからプロ野球まで対応可能な歴史ある野球場です。



敷島公園を見学するようす

水泳場は、五十メートル公認プールと県内唯一の飛び込みプールを有する水泳場です。

(財)日本陸上競技連盟第一種公認の正田醤油スタジアム群馬は、プロスポーツ公式戦も行われる県内唯一の陸上競技場です。

補助競技場は、個人利用からサッカー・ラグビー利用まで可能な第三種公認陸上競技場です。

テニスコートは個人利用、事前予約にも対応のクレイコートです。サッカー・ラグビー場は、グラウンド全面すべてが天然芝の専用のグラウンドです。

スポーツ系から文科系までの各種教室も開催されています。

ヨガ・アロマ・ボディシェイプ講座、心と身体スツキリ塾、ノルディックウォーク教室、水泳教室、野菜教室講座が開かれています。

公園管理事務所は各施設の管理運営を司る公園の心臓部です。

「木の森」敷島ステーション」が併設されており、各教室の会場として利用されています。

昭和四年、本多静六博士は「敷島公園の改良設計」を行い、「前橋市敷島公園計画案」を著したのは昭和九年のことでした。

次は、群馬県庁を見学しました。議員庁舎、行政庁舎、警察庁舎の三棟から構成されています。高さ百五十三メートルの行政棟は群馬県で一番高い建築物です。正午近く雲が切れ遠く榛名山や妙義山が見え、下を見ると利根川がゆったりと流れていて素晴らしい景観でした。

登利平本店で昼食を摂り、午後一番は臨江閣を見学しました。臨江閣は、本館、別館、茶室からなる和風の建築物です。本館は明治十七年、群馬

県初代の県令であった楫取素彦(かとり・もとひこ)の提言で市内有志らの協力と募金により迎賓館として建てられ、別館は明治四十三年一府十四県連合共進会の貴賓館として建てられた書院風建築です。

当日、最後の見学場所である前橋が生んだ偉大なる詩人、萩原朔太郎記念館を訪れました。詩集「月に吠える」や「青猫」他を次々に発表し、日本近代史に不滅の金字塔を打ち立てた詩人の記念館は、広瀬川の河畔にありました。

## 本多静六博士生誕百五十年記念誌の発刊を終えて

本多静六博士を顕彰する会  
会長 柴崎 一

本多静六博士(以下「博士」)が慶応二年七月二日、武蔵野国埼玉郡河原井村(現久喜市菖蒲町河原井)で折原家の六番目の子として生まれてから平成二十八年七月二日で百五十年の記念すべき節目の年を迎えました。

本多静六博士を顕彰する会(以下「顕彰する会」)では、このことを記念して「生誕一五〇年記念誌

「本多静六」森と公園を愛した人」と題した記念誌を発刊する事が出来ました。

顕彰する会にとりましては、組織結成後初めて取り組む大きな独自事業であり、そのために目に見えぬ障害と困難を乗り越えねばなりませんでした。

先ず、基本となる資金の捻出を考えねばなりません。顕彰する会といたしましては、こうした大きな事業を考え実施する日が予想されていきました事から、毎年節約に努めるとともに特別会計を起して資金の積立てを実施してきたところですが、言葉で云うことは極めて簡単でも現実は大変に厳しく、弱小組織の悲しさで、目標とする額には程遠い状況でした。

こうした危機的状況にあったとき本多家より過分なるご支援を賜り、予算の心配については回避する事が出来ました。このようなお心遣いに深謝しているところであります。

ところで、予算の裏付けに加えて、最も大事なことは記念誌の内容です。

このことについては、平素顕彰する会のため常にお力添えをいた

だいており、博士について造詣深い先生方のご協力をいただくことを前もってお願いを申し上げており、快く玉稿をいただくことになっておりましたので、この点での心配はありませんでした。大変ご多用の中、差し繰っていただき博士の顕彰にご協力を賜りましたことに心より感謝申し上げます。

ところで、肝腎な作成部数につきましては、無料配布を原則として実施するため予算との絡みから大変に難しい選択肢となりました。しかし、博士を顕彰するうえでの貴重な資料としての役割を考えた場合に、多くの人に知って欲しいことであり、そのためには作成部数は多いことが求められるわけですので、会員数にどの程度上積みをしたらいのかが大きな課題となりました。

検討の結果、博士の業績についていろいろと関心を持たれている方々に知っていただく機会を広く提供することが大切であるとの結論に達し、三千部印刷製本することに決定しました。

記念誌の配布については、顕彰する会の会員百八十名、執筆者の先生方への御礼分、関係機関(県

市)の各部および図書館、市内の小中学校の図書館、博士の関係した各公園、報道機関として各新聞社、地方PR誌社、放送局関係に優先配布を実施しました。そのこともあって、新聞各社の記事を読んだ読者からの依頼が延々四か月におよんで、この発送事務に事務局は嬉しい悲鳴を上げる始末でした。

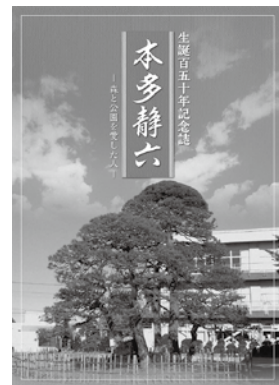
こうした状況で、発送部数は八月末現在で二千二百部を超えることになりました。現在もときどき依頼があり残部が心配になるような状況です。

このようなことから、博士についての関心の大きさを知ることができ、顕彰する会の役割の重大さを改めて痛感いたしました。

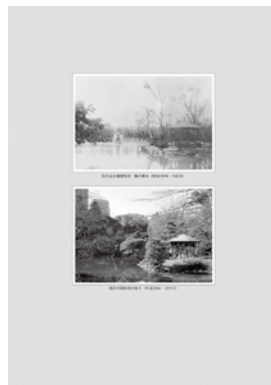
また、記念誌の発刊にあたり、編集について陰になり日向になりあたたかいご指導ご協力を頂きました関係の方々に、心より深謝いたします。

すべてに通じることですが、一つの物を造り上げるということは精神的にも肉体的にも大変なことであると同時に、極めて意義あることであります。この貴重な体験を糧として、今後の顕彰する会の

充実と更なる顕彰活動を深めてまいりますと念じています。



(表紙)



(裏表紙)

記念誌

### 会員を募集しています

本多静六博士を顕彰する会では、会の活動をさらに充実させるため、一緒に活動していただく会員の方を広く募集しています。また、当会の趣旨にご賛同いただける団体会員の皆さんも募集しています。

入会受付…随時

年会費…個人会員1,000円

団体会員5,000円

問合せ…本多静六博士を顕彰する会窓口

### 編集後記

本多静六博士の生誕地(久喜市菖蒲町河原井)にて地元の方々が参加された座談会での逸話が残されています。

大正時代の初め頃、地元の間根勇助さんという人が博士の生家、折原家に働きに行っていた。たまたま居合わせた博士に「村に消火ポンプが無いので困っている」と話したところ、それならと百円を寄付された。当時の百円は大金で、消火ポンプを買い、残金で消防小屋までも建てられたそうです。その性能の良いポンプで地元だけでなく、近隣の火事の際に使用され大いに役立ったとのこと。

寄付をお願いする際、村の代表が渋谷に住む博士のお宅へ伺った時「こんなことをしているから(渋谷へ来るから)金がたまらないし、成功しないのだ。こんなことは一銭五厘(はがき一枚の値段)で十分だ。」と、話されたそうです。つまり、無駄なお金を使うことは勿論、気遣いも無用であるということ、博士の故郷を思う気持ちに頭が下がります。(S)

【編集発行】本多静六博士を顕彰する会  
(窓口)

久喜市役所企画政策課

〒346-8501 埼玉県久喜市下早見85-13

電話 0480-122-1111(代)

久喜市菖蒲総合支所総務管理課

電話 0480-085-1111(代)